

# やまと

広報

9月号  
2010 No.211

特集

## 黒潮の恵みを食す。

（シラヒゲウニ漁・イセエビ漁・トビイカ漁）

### もくじ

- 02-07 特集：黒潮の恵みを食す。
- 08-11 ニュース：第19回ひらとみ祭り、ほか
- 12-13 お知らせ：タラソ利用料助成について、ほか
- 14-16 連載：いきむんマンディ、ほか

# 特集 黒潮の恵みを食す。

## イノー（磯池）の宝物 シラヒゲウニ漁



シラヒゲウニ漁は規則により漁業権が設定され保護されているが、奄美漁協ではウニ資源の回復にともない一般住民にも有料でウニの採取を許可している。

ウニ漁は潜水器具を使用して効率的に操業する専門の漁師から、干潮時に浅瀬を歩いて漁をする女性や高齢者まで幅広い人に親しまれる。

ウニの生息するイノー（磯池）はリーフによって外洋と隔たれ、多様な水産物が生息し、年間を通して人々に恵みをもたらす海の畑だ。

イノー内の水質汚染や藻の減少等によりウニの生息数が激減し、長らく禁漁が続いたが、平成14年頃から徐々に生息数が増加し、近年は誰もが手軽に季節の漁を楽しめるようになった。

今年はウニの漁獲量が少ないと聞くが、それでも各集落の海岸はウニを割る人々の姿で賑わう。

### 懐かしいシユウカザ（潮の香り）

ウニ割りの様子を取りしようと大棚の漁師、奥田敏光さん（71歳）のグループを訪ねると、「味見して行かんねー」と大粒の身がぎっしり詰まつたウニを差し出された。奥田さんは島の海を知り尽くした漁師の第一人者。実入り良い海域と生育状況を観察しながら採取しているのだろう。

奥さんの久美江さん（71歳）がウニをきれいに海水で洗い、手際よく二合瓶に詰めていく。

差し出されたウニを口にすると懷かしいシユウカザ（潮の香り）が鼻腔を抜けた。



## 82歳のトウビリイショ（潜り漁）

沖縄先島諸島からトカラ列島、長崎の島々まで潜り歩いた経験を持つ国直のイシヨン（漁師）、森和夫さん（82歳）。

毎日海を眺めるのが日課で、朝夕海岸に降りてきてしまは村人たちと談笑しながら一日を過ごす。

最近は出漁する機会がめっきり減ったが、ウニ漁やタコ漁、刺し網漁などといった浅海での漁は今でも続ける。

先日、ウニ漁のトモコギ（舟持ち）をお願いしていたら、裸になつて海に飛び込んできた。長年トウビリイショ（潜り漁）を営んできた血が騒ぎ、船上でじつとしていられなくなつたのだろう。もちろんシュノーケルやフイン、ウェイト等の漁具は使わず、身につけているのはトルクス一枚だ。

かつて追い込み組合の一員としてシロウルメ（ムロアジ）の追い込み漁を行っていた際も寒い冬の海で真っ裸で潜つたという。

華麗な身のこなしで泳ぎウニを探る姿に感動し、慌ててカメラを取りに自宅へ戻つた。

漁を終え船上で休憩していると、「ぬががる、昔にし潜らんと」（何故だか、昔の様に潜れないよ）と、森さんがつぶやく。

いつまでも気持ちはネセックワ（若者）の森さん。ご自分の年齢をお忘れの様です。





# 磯の王様

## イセエビ漁

数ある島の水産物の中でも、特に高級食材のイセエビは、キロあたり3千円を超える高値で取り引きされる「磯の王様」だ。

奄美近海では、イセエビ資源の保護のためエビの繁殖産卵期である春から夏の間を禁漁期間としているが、8月21日、漁師たちが待ちわびた解禁日を迎え、鮮魚店のショーケースには新鮮なイセエビが並んだ。

### ハーライビ（赤エビ）とオーライビ（青エビ）

奄美大島で水揚げされるイセエビ類はカノコイセエビ・シマイセエビ・ニシキエビ・ゴシキエビ・ケブカイセエビの5種類だが、カノコイセエビ（方言名・ハーライビ）とシマイセエビ（方言名・オーライビ）の2種類が漁獲量の9割以上を占める。

また、イセエビ類の他に、セミエビ（方言名・ゲジガニ）やゾウリエビ（方言名・テゴシャ）といった珍品も同時に出回る。

以前はエビ料理といえば、もっぱらみそ汁で食していたが、最近は刺身や網焼き、洋食の具材として多様な調理法で食べられる。

イセエビの習性と漁法

イセエビは岩礁地の割れ目や洞窟、転石帯の隙間等、「イビンヤ」（エビの家）と呼ばれる場所を住処としており、夜になると摂餌のためイビンヤから出て行動する。

一般的に水温が上昇する夏場に活動的になり、さらに月夜よりも闇夜、静穏時よりも荒天時はいつそう活発に動き回る。

イセエビ漁は、夜間に潜つてエビを捕まる「デントウイショ」（夜間電灯潜り漁）と、エビの通り道に網を設置して絡め取るアミイショ（刺し網漁）の2種類がある。

どちらも夜行性であるイセエビの習性を利用した漁で、今もなお村内で漁が営まれている。

### デントウイショ（夜間電灯潜り漁）

デントウイショは夜間の暗い海に潜り、腕に固定した水中ライトの光を頼りに獲物を捕らえる過酷な漁だ。以前は懷中電灯を自転車のチューブでくるんで使用していたが、現在はダブルティング用の高性能ライトが普及し格段に作業効率が向上した。





セミエビ

ソウリエビ

シマイセエビ

ゴシキエビ

年間を通してサザエや夜光貝などの貝類と、ブダイに代表される珊瑚礁の中で寝ている魚を狙うが、冬場にはコウイカ類、夏場はイセエビ類をメインに潜る。

イセエビは、触角に触れないよう注意を払いながらエビ用の特別なハサミやガギで捕まる。エビを死なせてしまふと商品価値が半減するので慎重な作業だ。

### アミイショ（刺し網漁）

アミイショはイビアミと呼ばれる小型で目の大きいクレモナ製の網を使う。夕方にイセエビの通り道に網を張り、翌朝に網を揚げる一晩ごとの漁だ。

網の設置ポイントは、ヒジャ（岩場の海岸線）やヤトウ（リーフの割れ目）シーバナ（リーフの際）、ナダラ（暖斜面）などいくつものパターンがあり、その日の潮や天候により場所を選定する。アミイショは早朝と夕方のみ作業を行うので、勤め人（兼業漁師）も容易に漁を行うことができる。換金商品用というよりは、自家消費用の漁だ。泳いでエビを捕まえるデントウイシヨに比べ「待ち」の感がある漁だが、早朝に網を揚げる際の期待と不安はとも言えない醍醐味だ。

# 黒潮の贈り物 トビイカ漁



トビイカ漁は夕方に出港し、日没から夜明け前まで操業する夜間作業、高齢の溜さんには過酷な昼夜逆転生活だ。しかし、きびきびと船上を動き、無線で活発に交信するその姿はバリバリの現役漁師そのものだ。

溜さんと豊漁丸は東シナ海に沈む夕日を追うように漁場へ向かった。

**82歳・現役漁師**  
午後6時、溜助則さん（82歳）の操船する第七豊漁丸（2・7トン）は大棚港を出港し漁場を目指す。

溜さんはトカラ列島や南西諸島各地で一本釣りや延縄漁を営んできた生粹の漁師だ。特に徳之島ではいち早く魚群探知機を導入し、ソネと呼ばれる漁場を数多く開拓した。現在は近海での日帰り操業が主で、夏期はトビイカ漁に従事している。

トビイカ漁は大きな光源により広範囲のイカを集め、省力化された機械で休みなく操業することでトビイカの漁獲高は大きく飛躍し、平成8年には年間漁獲高18トンまで増加、豊漁に沸く村の浦々はイカの墨で黒く染まつたという。

しかし、水産技術の向上と反比例して自然環境の変化によりトビイカ資源は減少し、ここ数年の漁獲量は低水準で推移している。

梅雨が明ける6月から季節風が吹き始める10月まで、大和村の沖合には黒潮に乗ってトビイカ（方言名・ばかりか）の群れが現れる。漁場には島内からイカを追う漁船が集結し、水平線を煌々と照らす集魚灯の漁火（いざりび）は大和村の夏の風物詩だ。大棚の漁師、溜助則さんのイカ釣り船に乗船し、最盛期を迎えたトビイカ漁の様子を取材した。

**トビイカ漁の変遷**  
島の先人たちは夏になると沖合にトビイカが現れることを経験的に知つており、サバニを操り漁場を目指した。近年になると舟は木造船からFRP船へと変わり、動力は焼き玉エンジンから船外機へ、明かりは松明からカーバイトランプさらには白熱灯へと発展した。

そんななか平成五年に、大型発電機と集魚灯、自動イカ釣り機の三点セツトによる機械式イカ釣り漁が導入されると大和村のトビイカ漁は大きな転換期を迎える。

機械式イカ釣り漁は、オモリを先端にプラスチック製のカラフルな釣り針を30個程連結し、数十メートルの海中に落としてはモーターによって巻き上げるという動作を繰り返す。釣り針に掛かったイカはローラー上を回転するときに自身の重みで針から外れ船上へ落下する仕組みだ。





## 漁師の気概・品質管理

午後7時30分、漁場に到着するとシーアンカーと呼ばれるパラシュー式の錨を投入し、集魚灯に灯がともされる。いよいよ漁の開始だ。

イカ釣り機のドラムに巻かれた釣針は、海中へ沈降と上昇を繰り返す。釣果に關係なく単純作業を繰り返すイカ釣り機は寡黙な労働者だ。

機械を始動させてしばらくすると、「ブシュツ」と勢いよく海水を吐きながらイカが釣れ始めた。

溜さんは「イカはすぐに締めんといかん」と呟きながら、手際よく海水で洗いクリーラーボックスに氷と海水を満たして冷やす。

「ワシのイカはいつまでもブイン(新鮮)ど」と、溜さんは胸を張る。獲物の温度管理を徹底し、釣り上げてから売り渡すまでイカを高温にさらすことなく品質を保持しているからだ。操業中に氷の在庫が不足すると、大漁中であっても漁を打ち切つて帰港するという。

また、イカは真水に浸かると急激に鮮度が低下することから、加工や洗浄を海水で行うとともに、雨の日は出港を見合わせるという徹底ぶりだ。

頂いたイカを刺身にして食べると、新鮮なトビイカ特有のコリコリとした食感があり、「ワシのイカはいつまでも…」と自負する翁の言葉を実感した。

## トビイカ漁の未来

トビイカ漁は漁師の高齢化に加え、漁獲量の減少や価格の低下、燃油高騰といった情勢から操業者が減少傾向にある。しかし溜さんは「やり方次第で漁は成り立つ」と、断言する。

溜さんは安価で大量に取り引きされる魚類市場への出荷を行わず、加工の手間がかかり販売ルートの確保が困難な浜売りを生業とする。大漁ともなると「いやこいしょらんなー」(魚を買ってくださいませんか)と村を行商して回ることも珍しくない浜売りだが、溜さんは長年の信用から多くの注文があり、数日先まで予約でいっぱいだという。

また、溜さんは規格外の小さなイカをさばかず内蔵のみを取り除くという独特的の加工法で販売している。小さく身の薄いイカは煮込み料理に適しており、奥さんの和子さん(70歳)はお客様さんにイカ飯等のオリジナルレシピや調理方法を広めている。

品質の良い商品を定時・定量で供給することによって漁が成り立つことを溜さんは証明する。

島の食文化に支えられ、根強い需要のあるトビイカ漁の未来は決して暗くはない。

漁を終え港へ向かう豊漁丸から見える島の嶺は白々と夜が明けようとしていた。季節と共に訪れる黒潮の恵みに感謝するとともに、漁師たちの航海の安全を祈り日の出に手を合わせた。

# 奄美群島夏祭りのファイナーレ

## 第19回ひらとみ祭り



8月28日、奄美群島最後の夏祭りを飾る第19回ひらとみ祭りが思勝港一帯で開催された。ひらとみ祭りはイベントで村を活性化しようと、大和村連合青年団（森亮団長）が実行委員会を組織して運営するボランティアによる手作りの祭りだ。当日は断続的な雨に見舞われるなか、村内外から多くの観客が訪れ、舟漕競争やステージ、2千発の花火を楽しみ、行く夏を惜しんだ。



祭りのメインイベント舟漕競争は村内外から強豪チームが集い、エンガ（男）の部に47チーム、メラブ（女）の部に35チームが参加した。

舟漕シーズン最後の大会らしく序盤戦から高レベルなレースが相次ぎ、エンガの部2回戦では奄美祭りの上位4チームが早々と対戦するという好カードが組まれ、観客から大きな歓声が上がった。

また、村内のチームが次々と姿を消す中、国直いっさごれ俱楽部チームと大和浜婦人会チームが健闘を見せ、地元のテントからは大声援とチズンや指笛による応援が鳴り響いた。

決勝戦は男女ともに奄美病院の同僚チームが接戦を制し、アベック優勝を果たした。

大会の競技水準が上昇するに従い、エンガの部では永らく村内のチームが優勝から遠ざかっており、来年こそは地元チームの奮起を期待したい。

舟漕競争の結果は次の通り。

- 【総合エンガの部】①奄美病院ドリームⅡ
- ②第三潮どき丸③仲勝④秋幾青壮年団
- 【総合メラブの部】①奄美病院なの②一心同体笑女隊③爆走姫相族④大和浜婦人会
- 【集落対抗エンガの部】①国直いっさごれ俱楽部②大和浜青壮年団③大和浜青壮年団
- 【集落対抗メラブの部】①ふうだなあまんぎやるず②国直いっさごれめらべ③思勝マリリン

## 新コース開設記念大会に歓声 まほろば大和グラウンドゴルフ場

奄美フォレストポリス内にある「まほろば大和グラウンドゴルフ公認コース」に、新たにクロウサギコース8ホールが設置され、8月14日に同コースの開設記念大会（大和村体育協会主催）が開催された。

当日は照りつける日差しのなか、村内外から32チーム160人が出場。

31回のホールインワンが飛び出すなど会場は一打ごとに大きな歓声が上がった。

新コースは参加者に好評を博し、今後もグラウンドゴルフのみならず生涯スポーツの拠点として期待が寄せられている。

試合は一二三会（奄美市名瀬）が2位以下を大きく離して優勝した。

試合結果は次のとおり。

【団体戦】①一二三会（209打）②ピックまこ（222打）③大和村協会4組（226打）④安勝みどり会（228打）⑤芦検チーム（229打）

【ホールインワン賞】藤枝悦郎（エンジョイ・イレブン）、三井仙一（笠利町・中金久）



## 家族と共に祭りを楽しむ 特養・大和の園夏祭り

特別養護老人ホーム大和の園（田中一幸園長）恒例の夏祭りが、7月24日、日曜日に開催された。

施設内に設置された特設会場は家族会や地域の人々で賑わい、入所者は家族に囲まれ夕べのひとときを楽しんだ。

入所者によるワイド節で祭りが始まわり、公民館講座生徒や地域婦人会、ボランティア連、施設職員など多くの出演者による舞踊や島唄、ダンスなどが披露され、島唄の際には入所者が飛び入りで参加し踊り出すなど大いに盛り上がった。

祭り終盤にはあいにくの雨に見舞われたが、観客全員が参加者の演技に暖かい拍手と声援を送った。

同祭りは職員をはじめとする地域ボランティアによる手作りの祭りだが、ステージの他に夜店なども出店し、ゆっくりと楽しむことができる。一度、ご家族や友人とお誘い合わせのうえ訪れてみてはいかがでしょう。

## フォレストポリスで 自然観察会

7月25日、奄美野鳥の会（鳥飼久裕会長）主催による自然観察会が奄美フォレストポリス・水辺の広場周辺で開催された。当日は晴天に恵まれたうえ、夏休み最初の日曜日と重なり多くの家族連れで賑わった。

子ども達は虫取り網で昆虫を捕まえては講師の先生に種類を尋ね、一つ一つ所定の記録用紙に記入した。

水辺の広場周辺には多様な魚類や両生類、昆虫類が生息し、絶滅危惧種のキバラヨシノボリやエグリタマミズムシ、バーバートカゲが確認されたほか、トンボについては、アオモンイトトンボやアオビタイトンボ、アマミルリモントンボ、アマミトゲオトンボ、オキナワチヨウトンボなど、計13種類が確認され、水辺の広場周辺がトンボの貴重な繁殖地であることが改めて確認された。

なお、水辺の広場一帯は野生動植物の捕獲が禁止されており、今回の参加者も観察した後は捕まえた生物を放ち、野生生物の保護に努めた。

## 子ガメ元気に海へ旅立つ

8月11日から18日にかけて、国直海岸でウミガメのふ化が見られた。

毎年ウミガメが上陸する国直海岸だが、今年は5月から6月にかけて15回の上陸跡が確認され、村の自然保護推進員が産卵場所にバリケードと看板を設置して卵を保護していた。

砂の温度が高温になりすぎるとふ化率が落ちると言われ連日の猛暑に卵の状態を心配していたが、11日頃から一晩に数匹づつ小規模のふ化が始まった。15日と18日の両日には2カ所の砂の中から一斉に子ガメが現れ、中には集落の街灯に惑わされ迷走する子ガメもいたが、全て無事に海に旅立った。

村自然保護推進員によると、「ウミガメの産卵とふ化を観察する際は、明るいライトや大きな声でウミガメを刺激せずに、離れた場所で観察してほしい」とのこと。もちろん許可無く卵を掘りかえしたり持ち帰ることはできない。今回ふ化した子ガメが少しでも多く国直海岸に戻って来るよう、ルールを守り自然環境の保護にご協力願います。

## 「心のケア」講演会が開催



「一人一人が向き合おう！うつ予防を中心とした心のケア講演会」と題し、9月6日に大和村中央公民館において講演会が開催され、村内外から140人が参加した。

講演会は鹿児島県始良・伊佐地域振興局保健福祉環境部長の宇田英典医師が講師を務め、「うつやストレスは誰にでもあり、正しい知識を持ち上手につきあいましょう」と、早期治療と地域全体で心の健康づくりの重要性を訴えた。

宇田医師によると、国内の自殺者は過去最多に増加し、年間の死亡者数は交通事故死の約3倍の3万人に達するという。自殺者の約8割から9割は心の問題を抱えており、そのほとんどが自殺行動に及ぶ前に何らかのサインを送っているという。

うつ病への対応として、がんばれと励ます言葉は禁句、アルコール等気晴らしへの誘いは慎重に、良きアドバイスは不要、仕事に対する負担の軽減などを説き、うつ病は治る病気なので診察や服薬等の治療を継続的に行うよう指導した。



うちの1本で、拝殿の左奥の高さ30メートル、直径1メートルほどのリュウキュウマツ。山の斜面に斜めに立っていたが、シロアリの食害により中が空洞化し、自身の重みに絶えきれなくなつて倒れるように倒壊したらしい。

倒壊時に近くにいた人の話によると「メリメリメリッ」と軋む音がして、ガサツと倒れた」とのこと。

政教分離や費用負担の観点から、役場や集落が撤去・処分を行うことができず、同神社の総代を努める高千穂神社の黒木代表も困惑した様子。



2011年3月の九州新幹線鹿児島ルートの全線開業に合わせて開催される第28回全国都市緑化かごしまフェア（愛称・花かごしま2011）のキャラバン隊が8月2日村を訪れた。

同フェアは3月18日から5月22日までの66日間、「南からの風にのせて！よかまち、よか花、よか緑」をテーマに吉野公園をメイン会場、鹿児島ふれあいスポーツランドをサブ会場に開催される。

キャラバン隊一行は都市緑化フェア推進室の森園秀人室長を始め、フラワーインジェルかごしまの辻本彩乃さん、マスコットキャラクターの「ぐりふー」（実行委員事務局企画広報班・皆内啓志さん）の3人。



8月19日にビニールハウスや肥料袋等の農業用廃プラスチック類（以下廃プラ）の回収を行った。

廃プラは産業廃棄物に分類され、農家の責任で処理するよう義務づけられている。名瀬クリーンセンターでは引き取らないうえ、野焼きや不法投棄は法律で禁止されている。

回収にともなう費用の一部を村及び農協が負担しているので回収に協力下さい。次回は11月19日、午前9時から午後4時まで、JA奄美大和支所前にて実施予定。

8月29日思勝港一帯で、大和村煙草組合（徳島義次会長）の組合員等による清掃作業が行われた。

同組合は、平成9年以降年2回の清掃活動を続けており、早朝から組合員20名ほどが参加。

この日はひらとみ祭りの翌日で、会場に散乱した吸い殻等を拾い集めゴミ20キロを回収した。

## 開饗（ひらとみ）神社の松が倒壊

## 花かごしまキャラバン隊がPR

## 農業用廃プラスチックを回収

# タラソ半額!



今田謙治相談員



秋の全国交通安全運動

内閣府



## タラソ利用料を半額助成します

タラソテラピーは、生活習慣病の改善や健康づくりに大変効果があります。

今回、左記条件で、タラソ利用料を助成します。この機会にぜひお申しこみ下さい。

**対象者** 大和村にお住まいの40歳以上の方（先着30名様）

**利用期間** 平成22年11月から平成23年3月

**利用頻度** 利用期間中、週一回以上継続する意志のある方

**利用条件** 期間中に実施する栄養教室（3回程度）を受講できる方

**交通手段** 自家用車または、タラソ専用バス（週1回運行・無料）

**利用施設** タラソ奄美の竜宮

**助成金額** 月会員またはチャレンジ会員利用料の半額を助成します。

**申し込み締切** 9月23日（木）大和村地域包括支援センターまで

☎ 0997-57-2218

## 秋の行政相談週間が始まります

10月18日から10月24日までの「行政相談週間」が始まります。

この週間は、広く皆様に行政相談制度を知つていただくとともに、ご利用いただることを目的に設けています。

この行政相談週間の期間中に、大和村および総務省鹿児島行政評価事務所では特設の相談所を開設し、皆様のご相談に応じます。

役所への苦情や要望などお気軽にご相談下さい。秘密は守られます。

**行政相談員** 村の行政相談員は今田謙治さん（大和村思勝346番地・☎ 0997-57-22927）です。

**巡回相談所** 10月18日（月曜日）午前10時から午後3時まで 今里公民館

**定例相談所** 10月22日（金曜日）午前10時から午後3時まで 大和村産業振興センター

## 平成22年秋の全国交通運動を実施

平成22年9月21日（火）から9月30日（木）までの10日間、「秋の国交通安全運動」を全国一斉に実施します。

今回の「秋の全国交通安全運動」では、スローガンを「ルールとマナー乗せて走ろう 秋の風」とし、交通事故死者数の半数が高齢者である厳しい現状を踏まえ、「高齢者の交通事故防止」を運動の最重点に据え啓発を行います。

また運動の重点として、  
①夕暮れ時と夜間の歩行中・自転車乗車中の交通事故防止（特に反射材用品等の着用の推進）  
②すべての座席のシートベルトとチャイルドシートの正しい着用の徹底（全席ベルト着用！「します・させます」運動の展開）  
③飲酒運転の根絶（飲酒運転「やつせん」運動の展開）  
以上の3つを重点事項として、より一層の交通事故の減少に取り組んでいます。

## 国直海岸にて開催 ラフウォータースイム

ラフウォータースイム・イン・奄美大島（主催・同実行委員会）が10月30日（土）国直海岸にて開催される。

ラフウォーターとは海上に設定された長距離コースで行われる水泳競技で、同大会の奄美大島での開催は今年で4回目となる（国直海岸では初）。日本国内を転戦し、奄美開催が最終第6戦目。島内外から多くの参加者が集まる大会だ。

レースは国直海岸をスタート、フィニッシュとして5キロ、3キロ、1.5キロ、リレー（1キロ×3名）の4種目が行われる。

参加申し込みやお問い合わせ先是、同大会実行委員会（パワースポーツ内）または大和村役場産業振興課まで。

〒251-10016

神奈川県藤沢市弥勒寺3-9-20  
☎ 0466-47-6720

<http://www.powersports.co.jp/>



# いきむん マンデイ

VOL. 01

鹿児島県は日本一のウミガメの産卵地と知られ、大和村でも毎年ウミガメの上陸や産卵が確認されています。今年はヒエン浜でも上陸を確認しました。しかし、残念なことに海岸には漂着ゴミや不法投棄されたゴミがたくさん落ちています。

そこで今回「ウミガメを守ろう！」浜で学んでビーチクリーン」と題して、7月18日（日）にヒエン浜の海岸清掃を行いました。

村内から21名の家族が参加され、まずは奄美で毎年産卵が確認されているアカウミガメ、アオウミガメの特徴や生態についてレクチャー。実物大の特製カメ甲羅を背負ったスタッフがアカウミガメ、アオウミガメの歩き方の違いも実演で教えてくれました。また、海岸にゴミがあると、上陸してきたウミガメや孵化した子ガメの行動を阻害する可能性があることや、海に浮いているビニールをクラゲと誤って飲み込み、場合によってはお腹に詰まって死んでしまうこともあるなど、人が捨てたゴミによって起こる問題について説明しました。



大和村自然保護推進員・勝間田さとみ

そしていよいよみんなでゴミ拾い！この日は強い日差しが射したり、突然雨が降りだしたりの変わりやすいお天気でしたが、蒸し暑い中みなさん真剣にゴミを拾つてくれました。1時間ほどの作業でなんとゴミ袋45袋分にゴミを回収。ゴミの内訳としては、発泡スチロール、ペットボトル、プラスチック類が多く、中にはガスボンベや注射針など危険なゴミも落ちていました。しかしゴミを拾つている途中、ウミガメの足跡や穴を掘った跡を複数確認し、ヒエン浜はウミガメにとって大切な環境なのだとすることが実感できました。来年もヒエン浜にウミガメが上陸するようみんなで見守っていきましょう！

※集落近くや、林道上での作業に、ご迷惑になるかと存じますがご理解・ご協力のほど宜しくお願い致します。

また、捕獲とは別に現在マンガース生息の有無を確認するため、自動撮影カメラやマンガースの毛を採取するためのわな（ヘアトラップ）を設置しております。

現在、奄美大島では、外来種であるマンガースを捕獲するため筒型と、カゴ型の2種類のわな（筒わな、カゴわな）を設置しています。カゴわなは、主に本島中南部の希少野生生物の生息が確認されているエリアで使用しております。

大和村にお住まいの皆さんも、林道や山中で見かける場合があるかと思います。これらのわなは、誤って触れてしまうと誤作動を起こすことがあります。これらはケガをすることがありますのでお手を触れぬようお願い致します。



## 奄美マンガースバスターズからのお願い マンガースの捕獲と生息確認作業について



筒わな



カゴわな



ヘアトラップ

マンガースの目撃情報や活動に関するお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。

財団法人自然環境研究センター 奄美市名瀬浦上 10-4 ☎ 0997-58-4013

環境省奄美野生生物保護センター 大和村思勝 551 ☎ 0997-55-8620



# 野山の

## 今里セブン・ソテツ

島の人々の暮らしと密接に関わってきましたソテツ。畑の土留や暴風林、コイクミと呼ばれる田への緑肥すき込み、何よりも飢餓食としてドウ（幹）やナリ（実）は幾度となく人々の生活を救ってきた。

人々は平地でサトウキビを栽培し、段々畑には芋を植え、痩せた崖地や岩石地にソテツを植え非常時に備えた。

終戦後の食糧難時に群島民が生き延びることができたのは、オヤフジ（祖先）達の知恵のおかげだ。

ソテツを大事に育てる地域では、今でも正月二日の仕事始めの日にソテツの苗を植える習わしが残る。

ソテツは古くから食用としていたらしく、奄美大島民俗史のバイブル、名越佐源太の「南島雑話」には、「ソテツの烟をたくさん持っている人は実を三、四トンくらい毎年貯える」と、記されている。

## 第二回

海上に神々しく鎮座する立神が美しい今里集落。その立神を臨む海岸の山裾に数字の7の形をしたソテツの群生地がある。

言われないと気づかないが、一度意識すると7の文字にしか見えないから不思議だ。

集落でもこの群生地を知る人は多くはないが、良く知る人たちは親しみをこめて「セブン」と呼ぶ。

村職員の森山博勝さん（60歳）によるとセブンは高さ3～4mの大きなソテツが密集しており、以前からナリの受粉や収穫などで利用していたとのこと。最近は山羊の食害で周辺の草が無くなり一層浮かび上がつて見えるという。

いつも見過ごしていた風景だが、見方を変えれば立神に次ぐ新たな景勝地の誕生だ。

村の広報担当たるもの、「第二のセブンを探さねば」と、気持を新たにした取材だった。



←バーコード読み取り機能付き携帯電話をご利用の方はここから  
大和村ホームページ携帯サイトへ簡単にアクセスできます。  
それ以外の方は直接URLを入力してアクセスしてください。  
(<http://www.vill.yamato.lg.jp/i/>)

発行・編集 大和村役場総務企画課

〒894-3192 鹿児島県大島郡大和村大和浜100番地  
TEL 0997-57-2111 FAX 0997-57-2161  
mail:[info@vill.yamato.lg.jp](mailto:info@vill.yamato.lg.jp)  
<http://www.vill.yamato.lg.jp>

お便りをお待ちしています。

村政への要望や広報誌への意見、今後特集してほしい記事などを募集しています。紙面にて紹介しますので、住所・氏名をご記入のうえ、左記住所（アドレス）まで郵送またはメールファックスでお送り下さい。

お便りをお待ちしています。